平成 28 年度　国立公園「阿蘇」みらい創造懇談会開催業務

■業務の背景と概要

平成 28 年４月に発生した熊本地震により、九州のシンボルとも言える阿蘇地域は大きな被害を受けた。土砂崩れや橋梁等の崩落、地割れ等が各所で発生し、自然資源や公園利用に大きな影響が生じ、その復興については、単なる復旧に留まらず、生きている大地に学び、その魅力を体験すると同時に生物多様性や循環型社会の形成まで含めた「創造的復興」をしていくことが重要であることから、環境省では、「国立公園『阿蘇』みらい創造懇談会（以下、「懇談会」とする。)」を設置し、阿蘇地域の自然を活用した創造的復興に向けた提言をとりまとめた。

■懇談会の開催

有識者委員７名で構成した懇談会を、６月１３日～７月１５日の約１ヶ月間で計３回開催した（右表)。甚大な被害を被った被災地の現地視察や被害状況報告等を通じて、被害の迅速な把握に努めるとともに、復興に向けた基本認識、基本テーマ、提言の骨子や内容等について意見交換を行った。第３回懇談会において、８つの柱からなる提言をとりまとめ、同日中に坂本座長から環境省九州地方環境事務所長へ手交式を行い、提言を公表した。

【懇談会概要】

会合	内容	委員（50 音順敬称略）
第１回 (H28.6.13)	○提言作成に向けた意見交換 ○阿蘇山上地区の現地視察 ○緊急調査、被害状況の報告	池辺伸一郎（阿蘇火山博物館館長） 大津愛梨（02 ファーム代表） 小林寛子（東海大学経営学部観光ビジネス学科教授） 坂本正（阿蘇草原再生千年委員会会長）※座長 坂元英俊（元阿蘇地域振興デザインセンター事務局長） 高橋佳孝（阿蘇草原再生協議会会長） 村田信一（熊本空港ビルディング(株)代表取締役社長）
第２回 (H28.7.4)	○提言骨子の検討 ○提言実現に向けた検討	
第３回 (H28.7.15)	○提言案の検討、とりまとめ ※同日、提言の手交式および公表	

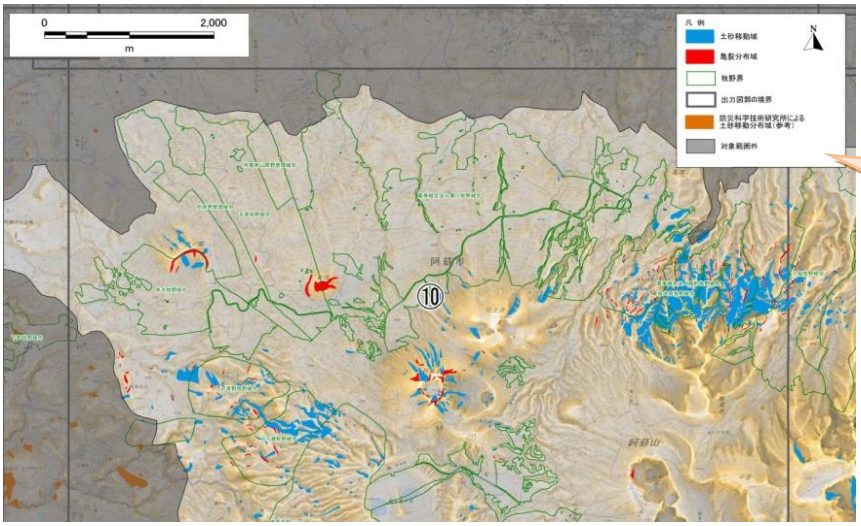
■緊急調査の実施（他業務との連携）

国立公園「阿蘇」の重要な資源である草原、湧水・温泉の熊本地震による変化状況を把握し、復旧・復興策を検討するための基礎資料を得ることを目的に、環境省では、６月～７月にかけて３種の緊急調査を実施した（下表)。緊急調査の進捗は懇談会で提示するとともに、７月下旬に環境省九州地方環境事務所ホームページにて調査結果を公表した。

【環境省実施の緊急調査（３種）概要】

	①	②	③
調査名	牧野組合長を通じた、被災状況と復旧・復興に関する意向把握	空中写真の判読による、土砂崩壊等の被害把握	関係者ヒアリング等による、湧水・温泉への影響
対象・方法	阿蘇草原再生協議会に加入の 91 牧野組合長を対象にヒアリング。	阿蘇地域の草原等約 480㎢において、地震発生前後の空中写真を用い、土砂移動及び亀裂分布域を判読。	阿蘇地域の湧水 26 箇所と温泉旅館等 53 箇所について、関係市町村・地元関係団体等に電話ヒアリング。必要に応じて現地調査。
受託実施	メッツ研究所	アジア航測（メッツ研究所委託）	プレック研究所
結果概要	○牧野に被害が出た牧野組合は全体の 64% ○被害により牧野利用または維持管理に支障が出るとの回答は全体の 37% ○被害の有無に関わらず、牧野利用をやめたいとする牧野組合はない。79%の牧野組合が維持管理の継続を希望。	○土砂移動域：470.91ha ○亀裂分布域：61.94ha ○中央火口丘、北側外輪山西部、南阿蘇村立野、西原村等の草原エリアにおいて顕著な亀裂分布が確認された。 ※成果物の GIS データは次ページの判読図参照。	○塩井社水源、揺ヶ池、水基めぐりの道の 3 箇所では依然として湧水の水位に変化が見られた一方、いくつかの湧水では地震直後に見られた濁りが解消されていた。 ○地震後に温泉湧出量に影響が見られた温泉旅館等は 19 箇所あり、再掘削の動きもすでに見られた。

【空中写真の判読による、土砂崩壊等の被害把握　判読図（火口北部抜粋）】



土砂移動域を青色、亀裂分布域を赤色、牧野組合エリアを緑線で図示

■提言の概要

阿蘇の景観を支える地元の方々に向けて、この提言を契機にして、阿蘇の自然・暮らし・文化を「創造的」に復興し、「みらい」に受け継いでいくための一助となることへの願いが込められている。

＜基本テーマ＞

阿蘇くじゅう国立公園の　“みらい型ナショナルパーク”としての新たな価値を築く

～自然とともに生きる人々の営みに支えられた、国立公園「阿蘇」の創造的復興～

一万年の草原、生物多様性、カルデラといった従来の魅力に磨きをかけるとともに、これまでの枠を超えた持続可能な社会づくりの視点から、世界に通用する“みらい型ナショナルパーク”　を目指すため以下の８つを提言。

柱	具体例
①人々の営みに支えられた阿蘇の景観と生物多様性を次世代へ	●草原の担い手である農畜産業の後継者育成 ●エリアごとの特性を踏まえた保全と利用のゾーニング
②熊本の阿蘇から、九州の阿蘇へ	●九州各地の観光地と連携した阿蘇復興プロジェクト ●草原再生活動の九州全体への活動拡大
③災害を記録し、変化の記録を継続する　災害の記録を展示し、後世に活かす	●草原や水源、温泉など阿蘇の基本的な地域資源の被災の記録と公表 ●研究機関との連携による専門性を加味した災害からの復興情報発信
④震災に学び、地域社会とともに災害への対応力の高い地域復興モデルをつくる	●エネルギーの地産地消推進 ●人工林の手入れ･治水･樹種転換など、グリーンインフラによる防災対策の推進
⑤農畜産業と観光が支え合い、地域経済の好循環を生み出す	●観光による収入を農畜産業に還元するシステムの構築 ●阿蘇特有の野草堆肥を利用した農業とそこから生み出される食材･景観の認定制
⑥阿蘇の観光スタイルの多様化に対応する	●草の道、歴史の道の再生、復興の道を加えた特色ある道の設定 ●利用者数を限定して入場料を徴収するようなエリアの設定
⑦世界への情報発信、外国人の受け入れ体制を整備	●震災からの復興・安全に関するリアルタイム情報の収集・発信 ●外国人や障がい者も楽しめる、五感を通じて楽しむ国立公園づくり
⑧次世代を育て、次世代に引き継ぐ	●住民参加によるジオサイト復元やミヤマキリシマ保全などの景観保全活動 ●教育委員会との連携による、環境教育と防災教育の一体化